

春秋戦国金文を素材とした制作

角 田 健 一 (大 塚)

Kenichi (Tajyo) Tsunoda

西周が東遷したのち、各地の諸侯は独自の文化を持つようになる。

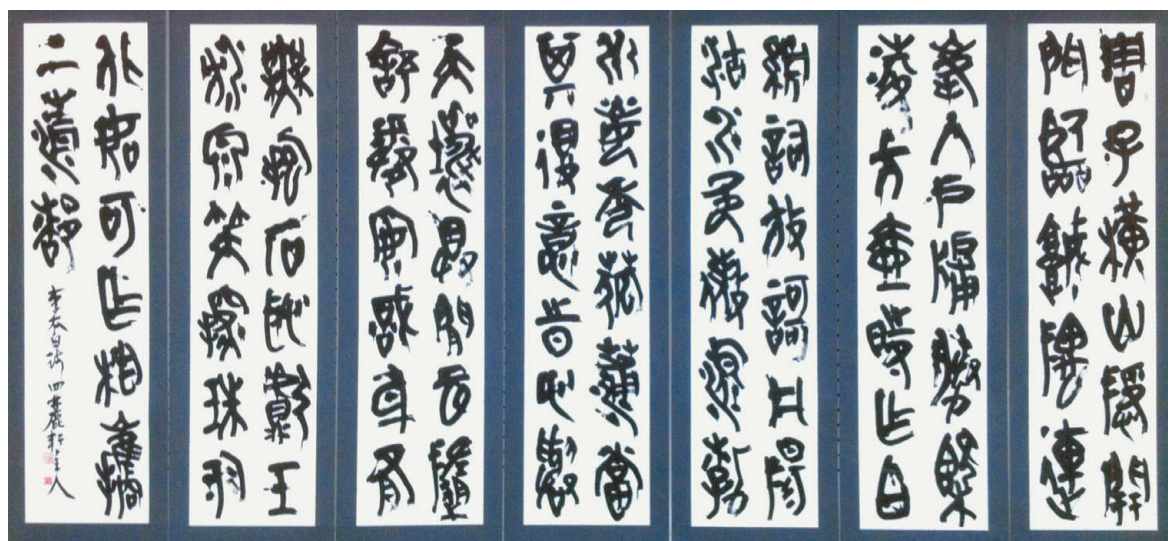
これは文字も同様である。春秋戦国期は、地方によって書風の差が現れる。既に専門家によって大まかな分類が試みられたのはよく知られるが、例えば陳夢家は、列国の器を東土系、西土系、南土系、北土系、中土系の五系統に分類した。

いずれの春秋戦国器の文字にも共通するのは、流麗・繊麗といった点であろう。西周金文に間々見られる重厚・荘重なイメージが薄れる背景には、周代の「鬼神を敬して之を遠ざける」から更に一段階進み、文字が一般の生活により近づいたことも一因に挙げられるように思われる。

その中で西土系を代表とする秦の文字などは、やや線状化が進んではいるが、整然とした姿を残す文字も多い。一方で南土系の楚の文字のように円転の字形を示すもの、同じ南土系でも越の「越王勾踐劍」などのように極端な装飾性（鳥書）を示すものもある。また

この時期は肉筆文字も多く見られるが、楚系の簡牘が多く、楚帛書もよく知られる。いずれにしてもそれぞれの地域で肉筆文字が見られるものについては大いに配慮する必要がある。実際に楚系の肉筆文字と青銅器に鑄込まれた金文には、明白な相互性が見られる。

拙作は、楚系の円転のリズムの要素をもらい、やや縦長の結体を選択した。文字の取捨選択は作家によっていくつか考えるところがあるとされるが、楚系の文字にはそもそも該当すると思われる文字がないものも多く、また文字があってもその根拠を見出しがたい字体を有している文字もあつて複雑である。なるべく字体の根拠のないもの、曖昧なものは排除し、金文や小篆の字体を大いに参考にした。結果、字体・字形の統一感は維持されたように思われるが、いわゆる楚系特有の字体は控えたため、その風はやや潜んだ結果となった。



137 × 35cm × 7幅

贈丹陽橫山周處士惟長（李白）